霧の中のギリースーツ

プーマ陸士長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霧の中のギリースーツ

【Ｎコード】
Ｎ２７８８ＢＡ

【作者名】
プーマ陸士長

【あらすじ】
２０１０年。
世界では紛争が絶えず、戦火はデモや暴動といった形で先進国にも飛び火しつつあった。
各国の軍隊では手に負えないような依頼もやってのける世界最大の

民間軍事会社があった。

民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」

これは民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」に所属する一人のスナイパーの物語である。

Ｅ☆エブリスタでも同様の名前で自分が投稿しております。
そちらの更新のほうが先なので、もしよろしければそちらもぜひご覧ください。

プロローグ

２０１０年４月２２日
午後８時１６分
アメリカ合衆国イリノイ州
シカゴ北部

民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」本部
執行部特務課所属
雨宮（あまみや）　護（まもる）

銃社会と呼ばれるほどに銃器が一般に広く普及しているアメリカ。
今となっては、一家に一挺は当たり前で、それ故に銃器を用いた犯罪は日常茶飯事だった。

今回の立てこもり事件もその一つだ。

……

……

……

日も沈み、人通りも少なくなった郊外に、警官の怒号が響き渡った。

警官
「容疑者に告ぐ。人質を解放し、武器を捨てて出頭しろ！そうすれば身の安全は保障する！」
警官がメガホンで犯人に説得を試みていた。

立てこもりの現場は郊外にある通りに面した酒屋だ。
コンビニのように前面はガラス張りになっているが、ブラインドが掛けられていて中は見えない。

酒屋の反対側の路肩には、その様子を眺める黒塗りのＳＵＶが二台停まっていた。

一台目には二人が乗っていた。
助手席にいる男が双眼鏡で様子を伺いながら口を開いた。

彼の名前はエイルマー・ボードン。
民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」の社員だ。

エイルマー
「あんなことして、出てきたためしがあるのかねぇ」
メガホンで説得している警官を見ながら言った。

運転席の男は雨宮（あまみや）　護（まもる）。
同じく「ＦＡＣＴＯＲ」の社員だ。
雨宮が続けて口を開く。

雨宮
「一応やっとかなきゃならないんだろう。警告なしで射殺なんてしたら大問題だ」

雨宮は無表情で、淡々と答えた。

エイルマー
「ま、お巡りさんがどこまでやれるか見ものだな」
見下したような口ぶりで答えたあと、「あっ！」と声をあげた。

雨宮
「？」
エイルマー越しに酒屋を見る。
すると、ブラインドから拳銃の銃口が突き出ているのが見えた。

パァン！パァン！

拳銃の乾いた銃声が響く。
弾はどうやら先ほどメガホンで説得していた警官のパトカーに撃ちこまれたらしかった。
警官たちがあわてて頭を引っ込める。

エイルマー
「説得は無駄だったな」
雨宮はシートを倒し、横になった。

雨宮
「やる前からわかってることだ」
あきれたようなため息をついた。

通りに停まっている警察のバンでも、先ほどの銃声で警官はやや驚いた様子だった。
警官を指揮する現場責任者がこの膠着した状況に頭を抱えていた。
かれこれ1時間にらみ合ったままだ。
犯人の要求は一つ。
逃走用車両の手配だ。
人質は幸いにも閉店間際だったため、店主一人だけだった。
犯人は二人組で、黒ずくめの服装、手には拳銃という格好のようだ。

警官
「さきほどの発砲による負傷者はいません」
警官が現場責任者に報告した。

現場責任者
「わかった…。ビル、どう思う？」
現場責任者の隣りにいるビルという男が口を開いた。
現場責任者と同じくらいの５０歳前後の白人男性で、体つきはがっちりしており、顔や手には縫合の跡が目立つ。

ビル
「私なら、いま外のＳＵＶで待機している者たちに任せますが」
現場責任者は路肩に停まっている黒塗りのＳＵＶを見た。
それは雨宮たちの乗るＳＵＶだった。

現場責任者
「しかし……。万が一失敗したら……」

ビル
「我々には万が一でも失敗する可能性は皆無です」
強く、誇らしげに言った。

現場責任者はしばらく黙りこみ、うつむいた。

しばらくして顔をあげ、口を開く。

現場責任者
「ビル……頼んだぞ」
ビルという男はうなずくと、無線を取りだした。

ビル
「こちらアルファ。ギリー、アローヘッド、応答しろ」

ＳＵＶに乗っていたコードネーム［ギリー］こと雨宮、［アローヘッド］ことエイルマーは、［アルファ］であるビルからの無線を聞

いた。

雨宮

「こちらギリー、アローヘッドも聞いています。どうぞ」

ビル

≪責任者から依頼が来た。ゴーだ。ターゲットの要求は逃走用車両の手配だ。出てきたところを仕留めろ。ターゲットの詳細はＰＤＡに送る。見取り図もだ。いいか。殺すなよ≫

すぐに雨宮たちの持つＰＤＡに情報が送信されてきた。

画面には、犯人の容姿、武装、人質の詳細、そして酒屋の見取り図があった。

雨宮

「よし」

雨宮が後部座席に移り、トランクからライフルを取り出す。

雨宮が使用するのは　Ｍ１４　ＥＢＲ。

７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾を使用するライフルだ。

続いて近代化カスタムされたＡＫ４７をエイルマーに手渡す。

エイルマー

「念のためだな」

エイルマーは弾倉に実弾が入っていることを確認し、薬室に弾を送った。

エイルマーたちのＳＵＶの後ろにいる２号車には、４名が乗りこん

でいる。
ビルから命令を受け、２号車はエイルマーたちのＳＵＶの横をすり抜けて酒屋の裏へと回っていった。
雨宮が犯人の武装を無力化後、２号車の社員４名が確保する。
雨宮はウィンドウを全開にし、カーテンを閉めて、カーテンから銃口とスコープだけを出して射撃姿勢を作った。

雨宮
「準備よし」

エイルマー
「待ってろ」
エイルマーがダッシュボードからレーザー測距機付きの単眼鏡を取り出して覗いた。

エイルマー
「射距離、１２０ｍ。横風はない。どうだ？」

雨宮のスコープに店の入口が写った。

雨宮
「問題ない。予定では３連射する予定だが…。どう思う？」

エイルマー
「言ってみろ」

雨宮
「まず人質に銃を向けてるやつ…。こいつがピッタリ人質にくっつ

いてたらまず足の指をふっ飛ばす。で、続けて銃を握ってる手もおさらばだ。ピッタリくっついてなかったらなんの問題もない。手を吹っ飛ばすだけだ」

エイルマー
「で、もう一人のやつには？」

雨宮
「二度とケチャップのふたを開けられないようにしてやる。それで十分だ」

エイルマーは微笑んだ。

エイルマー
「いいだろう。好きにしろ。支援する」

普通のやつなら、ここでやれ人質に当たったらどうするだの、狙いが逸れて犯人が死んだらどうするだの、グチグチ言うだろうが、エイルマーは雨宮に絶対的な信頼を寄せている。
そんな心配は無用だった。

二号車のチームが、入口からは死角の位置についた。

ビル
《二号車は位置についた。始めるぞ》

雨宮はＭ１４　ＥＢＲに、強装弾を装填した。

エイルマー
「来たぞ」
エイルマーはドアミラーから、警察の用意した逃走用車両が来たのを確認した。

逃走用車両が店の前で止まった。

警官がメガホンを取り出す。

警官
「逃走用車両は用意した。店先に止めてある！好きに使え！」

しばらくして、犯人二人が店から出てきた。
一人は人質にピッタリ張り付き、頭に銃を向けていた。

犯人
「銃を捨てろ！銃を捨てて両手を上げてろ！」

警官たちにむけて怒鳴った。

警官
「銃をその場に置け！両手を上げるんだ！」
包囲していた警官たちは素直に従った。

エイルマー
「射距離変わらず。風も変化なし。ピッタリくっついてるぞ」
雨宮は全神経を指先に集中させた。
意外とリラックスしている自分にちょっと驚いていた。

スコープの照準線がターゲットに重なる。

パキシュッ！

引き金を絞った。
いつも通りのマイルドな反動だ。
サプレッサーを付けていたため、発射音はあまり大きくはなかった。

雨宮の放った弾はまず、人質に銃を向けている犯人の足先に命中。
犯人は三本の指を失った。

パキシュッ！

痛みを感じる間もなく続けて二発目が放たれた。

二発目は犯人の銃に命中した。
ギュッと握りしめていたらしく、弾の衝撃をまともに受けた手首は、曲がってはならない方向に曲がり、犯人は倒れた。
もう一人の犯人は片方が倒れてからようやく状況を把握し、警官たちに銃を向けた。

パキシュッ！

そこで三発目。
弾は犯人の手の指の付け根付近に命中し、犯人は指二本を失った。
犯人は痛みにもがき苦しみながら倒れた。
痛みで銃はすでに手放している。

倒れた犯人はもう片方の手で落ちた拳銃を掴んだが、誰かが拳銃を踏みつけた。
踏みつけたのは二号車の社員たちだった。
社員
「残念だったな」
犯人はあきらめたのか、ガクッと顔を伏せ、手を頭の後ろへ置いた。

警官たちがすばやく犯人たちに駆け寄り、手錠をかける。

エイルマー
「全弾命中。ナイスショットだ」

犯人たちは痛みに苦しむ表情をしながらパトカーで連行されて行った。

無線にはビルからの激励の言葉が入った。

この依頼に参加した社員は、すべて「ＦＡＣＴＯＲ」本部の執行部特務課の社員たちだ。
「ＦＡＣＴＯＲ」内から、厳しい審査に基づく選抜によって選び抜かれた。
驚異の依頼成功率を誇る精鋭たちだ。

登場人物紹介

［名前］　雨宮　護
［よみ］　あまみや　まもる
［年齢］　２９歳
［国籍］　アメリカ合衆国
［身長］　１７９ｃｍ
［体重］　７８ｋｇ
［体型］　やせ型
［特技］　４００ｍ以内の射撃
［趣味］　読書・有酸素運動
［所属］　執行部　特務課
［愛銃］　Ｍ１４　ＥＢＲ
［愛車］　Ｄａｄｇｅ　Ｃｈａｒｇｅｒ　ＳＲＴ８　－０７
［コードネーム］　ギリー

［備考］

・ＰＭＣ「ＦＡＣＴＯＲ」の誇るエースシューター。
・４歳の頃に親の都合で渡米し、アメリカ国籍を獲得。
・日本語はもちろん、英語、ドイツ語が話せる。
・「ＦＡＣＴＯＲ」入社後の訓練課程では優秀な成績を残し、最終試験では首席で正社員への昇格を果たした。
・首席で昇格は、民間からの就職者としては異例で、このときから特務課への転属は検討の対象だったらしい。

・努力家で、冷静沈着。
・射撃が得意で、近中遠とすべての距離に対応できる。
・愛銃はスプリングフィールド社のＭ１４
・「狙撃はテクニックとフィーリング」だと思っている。
・そのためパワーまかせにドカドカ撃つ他のアメリカ人狙撃手を嫌う。
・ペアで観測手のエイルマー・ボードンとは入社以来の親友。
・冷静に状況を判断できる優秀な狙撃手。

［名前］　エイルマー・ボードン
［年齢］　２９歳
［国籍］　アメリカ合衆国
［身長］　１７５ｃｍ
［体重］　７８ｋｇ
［体型］　ややがっちり
［特技］　パソコン操作・目測
［趣味］　機械いじり・野球
［所属］　執行部　特務課
［愛銃］　ＡＫ４７　Ｅカスタム
［愛車］　Ｓｈｅｌｂｙ　ＧＴ５００　－６７
［コードネーム］　アローヘッド

［備考］

・「ギリー」こと雨宮とペアを組む観測手。
・雨宮とは執行部に配属されたときからの仲。
・共に特務課に選抜され、今に至る。
・雨宮に絶対的な信頼を置き、家族だと思っている。
・観測は抜かりなく行い、雨宮を全力でサポートする。
・観測手としての観測能力もさることながら、戦闘能力も目立たないがかなり高い。
・射撃の腕も一流だが、本人は得意としていないらしい。
・機械全般が好きで、ほっとくとなんでもいじり回る。
・愛車のメンテナンスは完璧で、クラシックカーながら快調に作動する。
・冷静な雨宮とは正反対で、課のムードメーカー。
・ネガティブな考え方を嫌い、常に良い方向へ考える。

［名前］　ビル・ブリッジス
［年齢］　５１歳
［国籍］　アメリカ合衆国
［身長］　１８１ｃｍ
［体重］　８６ｋｇ
［体型］　筋肉質
［特技］　状況判断・指揮
［趣味］　家族と遊ぶこと
［所属］　執行部　特務課　課長
［愛銃］　Ｍ１９１１カスタム

［愛車］　ＢＭＷ　Ｘ６
［大切なもの］　家族
［コードネーム］　アルファ

［備考］

・民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」の切り札である特務課をまとめあげる古参兵。
・陸軍出身で、グリーンベレーでの実戦経験も豊富。
・まもなく５２歳を迎えるが、まだまだ若年層には負けず、日々訓練で返り討ちにしている。
・日焼けし、端正の顔立ちと、スラッとしつつもがっちりした体型は新入社員の憧れの的。
・的確な状況判断で、部下を引っ張り、絶大な信頼を得ている。
・現役時代は狙撃手として任務についていた。
・年老いた今では雨宮に劣るものの、現役時代は雨宮と同等かそれ以上の腕を持っていた。
・家では優しいパパという一面も見せる。
・子供とはとても仲が良く、子供たち自身もビルと会うことを楽しみとしている。
・長女はまもなく２０歳を迎えるが、連絡は密にとっているようだ。
・家族で出かけられるように、愛車はＳＵＶのＢＭＷ　Ｘ６。

［名前］　エルンスト・ディーツェ

［年齢］　４１歳
［国籍］　ドイツ連邦
［身長］　１８１ｃｍ
［体重］　７５ｋｇ
［体型］　やせ型
［特技］　レーダー波の下を飛ぶ
［趣味］　空を眺めること
［所属］　航空部　回転翼課
［愛機］　ＡＨ－６４
［コードネーム］　ウォードッグ

［備考］

・民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」の誇るベテランパイロット。
・回転翼課では操縦技術に関しては右に出るものはいない。
・その技量を評価され、現在は「ＦＡＣＴＯＲ」で極少数運用されているＡＨ－６４アパッチのパイロットを任されている。
・どんなヘリでも手足のように自在に操ることができ、ＡＨ－６４アパッチの試験運用初日にアクロバット飛行を行い、関係者を青ざめさせた話は伝説として語られている。
・行動にも現れるように、かなり強気な性格で、その度肝を抜く操縦っぷりが災いし、副操縦士からペア解消を要求されたのは一度や二度ではない。
・しかしどんな飛行をしても決してめげない現在の副操縦士には信頼を寄せている。
・既婚者で、子供は二人いる。
・民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」で独自開発されているＡＵＨ－１Ｙの開発にも携わっているようだ。

民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」

［創設］１９８５年
［社員数］不明

［概要］
・世界最大の民間軍事会社。アメリカに三つ、ヨーロッパに二つ、アフリカに一つの支部を持つ。
・本部はアメリカ合衆国、イリノイ州シカゴにあり、某所には７００エーカーを超える訓練施設を持つ。
・航空機も多数所有し、輸送機から攻撃ヘリまで、相当数を常時運用可能としている。
・依頼内容は主に武力介入、破壊工作などの軍事行動や、建物警備、要人警護、運び屋などの警備活動など、相応の金さえ提示すればいかなる依頼も遂行する。
・軍事顧問や、訓練なども依頼があれば行う。

［人事］

・詳細な社員数は非公開につき不明。
・社員は退役軍人が七割を占めるが、現場勤務を希望する民間からの新入社員などに対しては軍隊以上の訓練を行う。
・特殊部隊出身者などが教官のため、訓練を受けた社員の能力は非常に高い。
・社員には様々な人種の人間がいるが、英語の日常会話が必須なので、情報伝達に支障はない。
・入社は厳正な審査によって決定する。
・全社員は一定数の戦闘訓練を義務付けられており、現場勤務の社員が不足の場合は事務員などに出動の機会が来る場合もある。
・本部には各支部から特に優秀な現場勤務社員だけを集めた特務課がある。

［装備］
・様々な依頼に対応するため、多様な装備が整えられている。
・普通の乗用車や装甲車、輸送機や攻撃ヘリなど。
・ほとんどが各国軍隊の払い下げ品。
・米軍の全面協力も得ているため、銃器を提供してもらったり、中古品を非常に安価で譲ってもらう場合も多々ある。
・社員の個人装備に統一性はないが、入社した社員には全員に決まった装備が最初に渡される。
・そこから自分好みにアレンジし、自分に合った装備作りを社員に行わせている。
・また、各支部では地元警察の協力を得て、社内での拳銃携帯が認められている。社外でも許可を取れば携帯が可能。

◎次章からの登場人物◎（次回からは後書きに掲載します）

レジーナ・マクダウェル」
航空部回転翼課所属。２７歳。
エルンストのペアで、ガンナー兼副操縦士を担当している。
白人の美人パイロットとして社内では有名。真面目で冷静。独身。

民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」（前書き）

◎この章からの登場人物◎

レジーナ・マクダウェル」
航空部回転翼課所属。２７歳。
エルンストのペアで、ガンナー兼副操縦士を担当している。
白人の美人パイロットとして社内では有名。真面目で冷静。独身。

［アレック・バーロン］
民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」の創設者にして社長。５６歳。
某国の特殊部隊の一小隊長を務め、戦場での経験から、民間軍事会社を設立。コネクションも非常に奥深く、根強く、広範囲に広がっており、その規模は計り知れない。謎が多い人物。家族あり。

民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」

翌日

４月２３日午前８時１１分

アメリカ合衆国イリノイ州
シカゴ市郊外
民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」本部

雨宮はＩＤカードを見せて正門を抜けた。
正門の警備は厳重だ。
応対する社員は拳銃のみだが、詰め所内には見えないところにアサルトライフルで完全武装した社員が待機している。

駐車場に車を止めて本部ビルに入った。

受付
「おはようございます」
受付は若い女性だが、腰に差さっている拳銃が似合わなかった。

雨宮
「おはよう」
ＩＤカードを渡し、機械に通して認証してもらう。

パソコンに付いているＬＥＤがグリーンになった。

受付
「どうぞ中へ」

強化防弾ガラスの自動ドアが開き、雨宮は進んでいった。

武器庫

雨宮は武器庫に寄った。

武器庫係の後ろには無数のロッカーが見えなくなるほど奥まで続いている。

武器庫係
「おはようございます」
若い男性社員が応対する。

雨宮
「おはよう。雨宮護。認識番号は６４８９。携帯用だ」

武器庫係がお待ちくださいと言って奥に消えた。

武器庫係
「どうぞ。こちらです」
カウンターにホルスターに収まった拳銃と予備弾倉が置かれた。
「ＦＡＣＴＯＲ」では社内での武器携帯が認められている。
外出時も緊急の依頼などに対応するために許可が出ることもある。
特務課の社員には申請を出せば大抵許可が降りる。

雨宮
「どうも」
雨宮はホルスターを腰に差し、武器庫を後にした。

特務課オフィス
雨宮は自分のデスクに座り込んだ。
隣はエイルマーだ。
エイルマーは敷居の横から頭を出して言った。
エイルマー
「よっ。朝から冷めてるねぇ」
雨宮
「悪かったな。これが普通だ」

カバンを横に置き、パソコンを起動する。

エイルマー
「今日のお仕事なにか聞いてるか？」

雨宮
「いや……。今日はなんだ？」

エイルマー
「なんでも社長がニューヨーク支部に用があるらしくてな。付き添いだよ」
雨宮は背もたれにギッと寄りかかった。

雨宮
「護衛か」

パソコンを起動すると、すぐに新規依頼が送信されてきた。

社長の警護任務だった。
社長直々の依頼もあり、報酬も高い。

エイルマー
「な？けっこう報酬高いだろ？」
雨宮
「金だけじゃ良い仕事はできない」
雨宮は準備のために立ち上がった。

エイルマー

「あ、はえぇ！ちょっと待てよ！」

スタスタと雨宮はオフィスを出て行ってしまったが、廊下でしっかり待ってくれていた。

午前９時３５分

イリノイ州シカゴ市内

世界最大の民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」の依頼は、たいていチーム単位でされるもので、個人単位ではあまりない。

そんな中、雨宮とエイルマーが社長に直々に選ばれたということは、かなりの信頼を寄せているという証だった。

社長の名はアレック・バーロン。

白髪の混じった初老のビジネスマンのようにしか見えないが、手の甲の傷や、首元の傷、がっちりした体格などが、ただのビジネスマンでないことの証明だ。

アレック社長を乗せた車は空港へ向けて進んでいた。
運転手はエイルマーだ。

車内には沈黙が流れる。

アレック社長
「訓練とかはどうだ？問題はないか？」
社長が口を開いた。

雨宮
「ええ。問題ありません」
淡々と答えた。

アレック社長
「相変わらず雨宮は口数は少ないな」
社長が笑う。

雨宮
「…すみません」

アレック社長
「まあいいさ。ラジオかなにか付けてくれ。静かなのはどうも苦手だ」

雨宮
「あ、はい。了解しました」

雨宮がラジオを付けた。

痺れるようなロックが流れる。

エイルマー
「♪～♪」

和やかな雰囲気で時は流れていった。

シカゴ市郊外
合衆国空軍シカゴ基地

手続きを済ませて格納庫前までバンを乗り入れた。

すでに「ＦＡＣＴＯＲ」固定翼課が所有するレシプロ機が待機していた。

「ＦＡＣＴＯＲ」の固定翼課の機体はすべてこのシカゴ空軍基地に置いてある。

社員
「お待ちしておりました。どうぞ」
航空機整備課の社員が三人を機内に案内した。

機長
「わずか二時間ではありすが、今回の旅のサポートをさせていただ

きます。よろしくお願いします」
機長が旅客機のような口調で、インターホンで話した。
社長は笑顔で返した。
それに安心した機長は、エンジンを始動させ、滑走路へ向かった。
エイルマー
「着く前に起こせよ」
雨宮
「ああ」
エイルマーは目を瞑ってしまった。
雨宮は後ろの社長の方を向いた。
雨宮
「すいません。自分はきちんと起きてますので」
アレック社長
「ああ。かまわん。今日は私だしな。他の護衛対象のときにそれじゃ困るが……。君たちなら大丈夫だろう。休めるときに休むといい」
雨宮は礼をしてから、前を向いた。
こういう気遣いは、特殊部隊を経験した社長ならではだろう。
一分の休息も、戦場では貴重なのだ。
ホルスターから拳銃を取り出し、弾を確認した後、浅く眠りに入った。

数時間後

午後２時４１分

アメリカ合衆国ニューヨーク州
マンハッタン
ＮＹ支部ビル１４階

アレック社長が支部長室に入ってからずいぶんと時間が立っていた。

エイルマー
「なんの話だろうな」
エイルマーが廊下を警戒しながら小声で聞いた。

雨宮
「さあ……」

エイルマー
「なんかあったのかな？」

雨宮

「さあ……」

エイルマー
「もしかして新装備導入か？」

しつこい。

雨宮
「黙って警戒してろよ」
雨宮がそう言うとエイルマーは黙り込んだ。

口数の減らないやつだ……と雨宮は思った。

雨宮
「！」
廊下の曲がり角の向こうから足音が聞こえてきた。

エイルマー
「……」
エイルマーもそちらを注視していた。
二人の空気が張りつめる。

曲がり角から、コーヒーセットが載せられた台車を押す男性社員が現れた。

雨宮
「カバーしろ」

エイルマーは支部長室のドアのくぼみに身体を入れ、雨宮は拳銃に

触れながら近付く。

雨宮
「失礼。これは？」

男性社員
「え……。支部長から頼まれたコーヒーですが…」
男性社員の腰には膨らみがあった。
おそらく、ダブルカラム式弾倉の拳銃を持っている。
ダブルカラムの拳銃はどうしても幅が出て携帯には少し不向きだ。

雨宮
「特別警戒を実施しています。武器をお預かりします」

男性社員はため息混じりに自分の拳銃を渡した。
なにもしねぇよ……といった表情だった。

拳銃はベレッタＭ９２ＦＳ。
ダブルカラム式弾倉で、装弾数１５発を誇る。
アメリカ全軍で使用されてる信頼性の高い銃だ。

エイルマーがドアを開け、男性社員を中に入れた。

雨宮
「ちゃんと整備されてないぞ。汚れてる。これだから事務職の連中は……」
雨宮が預かったベレッタをいじくる。

エイルマー
「事務職は普段銃は撃たない。扱いには不慣れなんだよ」

雨宮
「だからこそ、きちんと整備しとくべきなんだ。……ったく」

男性社員に返すとき、雨宮は整備不十分を注意したが、あんたら人殺しといっしょにするな、と言われてしまった。

午後４時４８分

アメリカ合衆国
イリノイ州上空

アレック社長
「雨宮」
社長に雨宮と呼ばれ、振り返る。

アレック社長

「お前、コーヒーを運んできた男性社員となにかしたか？」
雨宮はギクッと驚いたが、平静を保った。
雨宮
「…ええ。しかし、護衛任務の範囲内です。向こうが謝れというなら、後ほどＮＹ支部へ行きます」
社長は首を振った。
アレック社長
「いや、そんなことはどうだっていいんだ。なにか不機嫌そうな顔をしていたから、外でなにかあったかな…と思ってな。腰の拳銃もなかったし」
雨宮
「拳銃が整備不十分だったので……」
雨宮はむくれたように言った。
アレック社長
「仕方ない。彼ら事務職にお前らの苦労などわからん。ましてや年間決まった数しか撃たない奴らだ。整備なんて二の次だろう」
特務課などの戦闘要員が属する課を、事務職の一部が嫌うのは、元来仕方のないことなのだ。
大半は敬意を表し、仲は良好なのだが。
アレック社長
「とにかく、今日はご苦労だった。休めるときに休め」

雨宮
「はい」
雨宮は目を瞑った。
まもなく、機は高度を下げ着陸態勢に入った。

午後６時１５分

イリノイ州シカゴ市内
「ＦＡＣＴＯＲ」本部
地下屋内射撃場

ダァンダァンダァン！

銃声の後、薬莢が床を転がる音が響いた。
雨宮
「……」

ほんのり熱くなってきた拳銃を置き、空の弾倉を抜いた。

雨宮の拳銃はＨＫ社製　ＵＳＰ４０だ。
フレームはＴＡＮカラーとなっている。

普段の依頼だとこの銃を使うが、今日のような携帯が必要な場合だと、ガバメントのオリジナルカスタムや、ガバメントのキンバーカスタムを使用する。

今日はキンバーカスタムだった。

今日の対応はあれで正解だったのか……。
雨宮は仕事が終わるといつも考える。

翌日

４月２４日午前１０時１８分

アメリカ合衆国イリノイ州北部
民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」
本部　ヘリポート

航空部回転翼課所属
エルンスト・ディーツェ

本部の敷地は広大で、ヘリ用のヘリポートや、整備工場など必要な設備は整っており、この本部ヘリポートから直接行動に移ることもできる。

今日は「ＦＡＣＴＯＲ」が独自に改造したヘリのテストの日だ。

テストパイロットを頼まれたエルンストは、コクピットから空を見上げた。

本来ならＡＨ－６４の担当であるエルンストは、天才的な操縦技術を持つ。
そのためテストパイロットに選ばれた。

ヘリはまだ最終調整中で、整備員が右往左往していた。

副操縦士席には、いつものレジーナ・マクダウェルが座っている。

タフな女だ。

おれの操縦にぐうの音一つ吐かない。

いままでの腰抜け男よりも全然マシだ。
優秀だし、仕事はキッチリやる。

レジーナ
「機長、システムチェックを」

それに若い。
まだ二十代だろ。
美人だし……。

レジーナ
「機長？」

そろそろヘリを降りて男みつけた方がいいんじゃないか？

レジーナ
「機長！！」

エルンスト
「んをっ！」
エルンストは我に帰った。
ずっとレジーナを見てボーッとしていたようだ。

レジーナ
「システムチェックです。いいですか？」
エルンスト
「あ、ああ。整備が良しといったのか？」
レジーナ
「とりあえず電源は良しだそうです」
エルンスト
「よし。始めよう」
エルンストはヘリの電源を入れた。
ここで、頭にブリーフィングの様子が浮かんできた。

ブリーフィング

技術課課長
「今回、テストをお願いするのは、この機体だ」
暗い会議室、前のスクリーンにテストする機体の三面図が映し出された。

エルンスト
「ヒューイ……か」
エルンストが独り言のように呟いた。

課長
「そうだ。原型はヒューイだ」

三面図はＵＨ－１に改造を施したものだった。

キャビン下部の両サイドに新たに武装搭載用の固定翼が伸びていた。

ＵＨ－１、通称ヒューイは、米軍が採用している輸送ヘリだ。現在はＵＨ－６０ブラックホークが主力輸送ヘリだが、ベトナム戦争から使われ続け、様々な改良が成された機体は信頼性が高い。

レジーナ
「見る限り、ベトナム戦で使用されたヒューイを改造したガンシップに似ていますが……」

ヘリが初めて本格運用されたのはベトナム戦争が最初だ。

ＵＨ－１を中心にした輸送ヘリ部隊援護のために、ＵＨ－１に武装を付与し、改造したものが攻撃ヘリとして使用されはじめた。

その改造攻撃ヘリにそっくりなのだ。

課長
「たしかに似ている。だが性能は段違いだ」

スクリーンにエンジンが映る。

課長
「まず、エンジン。これは現在米軍が使用する、ＵＨ－１の最新型、ＵＨ－１Ｙヴェノムに搭載されるエンジンに改造を施し、馬力を向上させたものだ」

エルンスト
「たしかにこれなら搭載量は増えるな」

次に武装、及び火器管制装置についての詳細がスクリーンに映される。

課長
「固定武装は右片側に２０ｍｍチェーンガンが一門だ。それに加えてあと二種類の武装が搭載できるようにラックが追加されている」

ヘルファイア対戦車ミサイル
ＴＯＷ対戦車ミサイル
ＡＩＭ－９　サイドワインダー空対空ミサイル
ＡＩＭ－９２　スティンガー空対空ミサイル
ロケット弾発射機
Ｍ１３４　７．６２ｍｍバルカン
が搭載できるようだった。

しかし、最大搭載重量もあるので、あれこれと欲張りはできない。

課長
「照準は機長席、副操縦士席のＨＵＤと、副操縦士席に追加された照準装置を用いる。アパッチのようにアイリンクシステムとまでは

いかないが、チェーンガンに関しては上下に可動する。かなり狙いやすくはなってるはずだ」

乗員は操縦士二名、機付員二名、兵員は2～5名乗ることができる。キャビンの座席をおろせば、追加燃料や、追加弾薬を搭載できるようだった。

ヘリポート

レジーナ
「全武装、オールグリーン。行けます」
ブリーフィングの内容を振り返ったエルンストは、自分に渇を入れた。

エルンスト
「了解」
エルンストはコクピットから空を見上げた。

これで集中できる。

レジーナ

「整備課は離陸準備よしです」

周りで調整をしていた整備員が一定の距離を離れ、正面の誘導員は「離陸よし」の合図を繰り返していた。

エルンスト
「よし。出るぞ！」
生き生きとした顔でコレクティブを上げた。

フワリと機体が上がり、機体下部のスキーが柵をかすめるほど低空で離陸した。

整備員
「相変わらずすごい操縦ですね……。テストだってわかってるんでしょうか？」

班長
「それぐらいでビビるタマじゃないだろあの人は……」

整備員たちは低空で離脱するヘリを見送った。

機内

エルンスト
「計器すべて正常。振動なし。このままテストを続行する」
機体は非常に安定していた。
テストでは実弾を実戦形式で満タンに搭載しているので、もっと動作が重いかと思っていたが。

レジーナ
「あと1分で訓練場です」

エルンストは少し高度を上げた。
視界に「ＦＡＣＴＯＲ」訓練施設が見えてきた。

どっかの演習場並みに広い。

エルンスト
「こちらウォードッグ。計器、機体すべてグリーンライト。実弾テストを開始する許可を頼む」

無線
《こちら観測所。いいぞ。やってくれ》

エルンスト
「全武装安全装置解除。チェーンガン、発射用意」

レジーナ

「用意よし」

機体は戦闘機動に入った。

標的に照準が定まり、エルンストは引き金を絞った。

バララララララ……

一航過のうちに標的はバラバラになった。

観測所

《標的の完全破壊を確認。次はヘルファイアだ》

レジーナがパネルをパチパチといじる。

その間に、機体は戦車を模した標的に機首を向けた。

エルンスト

「任意で発射しろ」

レジーナ

「了解。レーザーを確認。ロック完了。発射！」

右の固定翼からヘルファイア対戦車ミサイルが放たれ、吸い込まれるように標的に命中した。

観測所
《よし。いいぞ。結果は良好だ》

夕刻
午後5時2分
回転翼課オフィス

エルンスト
「なかなかいい感じだったよな」
報告書を書いてる最中、エルンストはレジーナに話しかけた。

レジーナ
「そうですね。輸送ヘリを改造しただけのわりには機器も最先端だし、機動もギクシャクしてせんでしたね」
比較的冷静な彼女が、嬉しそうに話した。

エルンスト
「うん。パワーもあったしな。おれも大分楽だったよ」

カタカタとキーボードを叩く音が響く。

エルンスト
「ま、アパッチには遠く及ばんがな」

レジーナ
「ですね」

二人は誇らしげに笑い合った。

その姿は趣味の合う父と娘が、楽しそうに話をしているようだった。

民間軍事会社「ＦＡＣＴＯＲ」（後書き）

次章からの登場人物

［デイモン・ブレット］
執行部特務課所属。２５歳。
医務課から転属された衛生兵的な役割の社員。
自分にできることを確実にこなす優秀な社員。雨宮を尊敬している。
アメリカ人。コードネームは「バル」

［一ノ瀬雄太（いちのせゆうた）］
執行部特務課アルファチーム所属。２９歳。
陸上自衛隊出身の日本人。非常に高い戦闘能力を持つ。口が悪いが、
自衛隊らしい堅苦しさが無く、親しみやすい。ライフル兵。コード
ネームは「フォール」。

［フランシス・エヴァーズ］
執行部特務課アルファチーム所属。元デルタフォース。３２歳。
元特殊部隊ながら頭脳明晰、基礎学力が高く頭がいい。特技は地図
関係。ライフル兵。コードネームは「ライトニング」。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2788ba/

霧の中のギリースーツ

2012年1月10日12時46分発行